

心の栄養剤N. 49

ある日、東京ディズニーランドに若い夫婦が訪れ、レストランで「お子様ランチ」を注文しました。対応したアルバイトの青年は戸惑いました。この夫婦は、子供を連れていないのです。マニュアルではお断りすることになっています。

『おそれいりますが、大人の方は・・・』と言おうとしましたが思いとどまり・・・
『失礼ですが、お子様ランチはどなたが食べられるのですか？』と尋ねてみました。すると奥さんが、うつむいたまま話し始めたのです。

『死んだ子供のために注文したくて・・・』

『・・・・・・』

『私たち夫婦には、なかなか子供が授かりませんでした。ずっと願い続け、やっと娘が生まれましたが、身体が弱く、一歳の誕生日を待たずに亡くなってしまいました。今日は、その子の命日なのです・・・』

『そうだったのですか・・・』

『子供が大きくなったら、親子三人でディズニーランドに行こうと楽しみにしていました。とうとう実現はしませんでした。一周忌の今日、せめて私たちの心の中に生きている娘をディズニーランドに連れて行ってやりたいと思ったのです。本当に娘が生きていたら、ここでお子様ランチを食べてたんだな、と思うとつい注文したくなって・・・』

アルバイトの青年は、笑顔に戻っていました。

『お子様ランチのご注文を承りました。ご家族の皆様、どうぞこちらへ』
と言って、この夫婦に二人用のテーブルから四人がけの家族テーブルへ移動してもらい子供用の椅子まで持ってきたのです。

『では、お子様はこちらに』

まるで子供が生きているかのように、小さな椅子へ導きました。間もなく運ばれてきたのは三人分のお子様ランチでした。

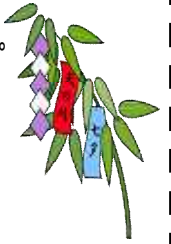
『ご家族でゆっくりお楽しみ下さい。』

アルバイトの青年は笑顔で去っていきました。

この心遣いに感動した夫婦は、帰宅してからお礼の手紙を書いたそうです。

『お子様ランチを食べながら、涙が止まりませんでした。』

まるで娘が生きているように家族団欒を味わいました・・・ありがとうございます。』



何度読んでも、その度に目頭が熱くなる話です。素晴らしい真の“思いやり”とか“優しさ”とか“サービス”は、その人の「感性の豊かさ」や「想像力の大きさ」で決まると思います！

私もこの話のアルバイト青年に負けないよう、ご縁のあるお客様の“痛み”や“苦しみ”をしっかりと受け止める力（愛情）を身につけていかななくては、キュートも私も存在価値（意味）がないんだという気持で研鑽しなくては・・・

もうすぐ「夏休み」という事で、多くの家庭で子供さんたちの・・・

「海行きたい！」「山行きたい！」「遊園地連れてって！」

とのリクエストがいっぱい出始める頃だと思い、この話を載せる事にしましたが・・・どこかに連れて行ってあげても、あげれないとしても、子供たちにとって、この夏休みという時期が豊かな感性と想像力を育むには絶好の時間だと思えます！！

私も遠い数十回の夏休みを思い起こすと、何となくキラキラした感じ～切ない感じ～寂しい気分～ウキウキな気分が、ごちゃ混ぜになって蘇ってきます。

このいろんな気分が、今の私を作っているような気がします！

皆様が、命がキラキラ輝くような夏～夏休みを過ごされます事を心より願い、お祈り申し上げます。

